

ウイ但馬

第2号



2023

**特定非営利活動法人
但馬自然史研究所**

ウイ但馬 NO.2 2023

目次

| | | |
|-----------------|----------------------------|----|
| 1. 足立 義弘 | 春を告げる花「山桜」について | 1 |
| 2. 山本 一幸 | 久斗山のクモだより | 6 |
| 3. 村田 美津子 | モリアオガエルの上陸日数 | 12 |
| 4. 村田 美津子 | 豊岡市の秋・冬の鳥情報 2022.10~2023.3 | 15 |
| 5. 村田 美津子 | 竹野の漂着物 | 17 |
| 6. 西垣 由佳子・杉野 安梨 | 飼ってみてわかったヤゴの気持ち | 19 |
| 7. 松本 茂樹 | 竹野の方言【魚介類】 | 23 |

表紙写真：研究所前ケヤキ下でのイベント風景
撮影：本庄 四郎

春を告げる花「山桜」について

足立 義弘

春になると萌黄色の山並に薄いピンク色の「山桜」が目立つようになる。今年の「山桜」は早いとか、どこそこの「山桜」はいつも他より遅く咲く。また、例年より長く咲き続けている。などと春の訪れと共に「山桜」は話題になる。しかし「山桜」はどの桜もヤマザクラなのだろうか。素朴な疑問がふと浮かんだ。

そこで但馬に記録のある「山桜」バラ科サクラ属サクラ亜属の野生種について調べてみると、キンキマメザクラ *Prunus incisa* ssp *kinkiensis*、ヤマザクラ *Prunus jamasakura*、エドヒガン *Prunus spachiana*、カスミザクラ *Prunus verecunda*、オオヤマザクラ *Prunus sargentii*、の5種類あることが分かった（兵庫県の樹木誌 兵庫県 1996）。一般には山間地に咲く野生のサクラは「山桜」という呼称で一括されていて、種の違いは意識されていないのではないだろうか。まあそれでもいいのかも知れないが、なんの疑問もなく、ポーっと「山桜」を見ているだけではつまらない！

では、これらの種類が実際にどう違うのか、各種のサクラの見分けができるかどうか好奇心にまかせて調べてみた。

調査地は、豊岡市では主に来日岳とその周辺でキンキマメザクラ、ヤマザクラ、カスミザクラ、そして竹野町下村、朝来市和田山、夜久野高原周辺のエドヒガン。香美町小代区の熱田とクロミドリシジミが兵庫で初めて発見された小代区新屋のオオヤマザクラ。

見分け方は図鑑などをもとに花と葉の主な特徴（写真 花の部分、葉の部分）を整理してみた（表1）。



表1 サクラ類の花と葉の主な特徴

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|----------|--|--|---|---|---|
| | キンキマメザクラ <i>Prunus incisa.subsp.kinkiensis</i> | エドヒガンザクラ <i>Prunus Pendula</i> | ヤマザクラ <i>Prunus Jamasakura</i> | カスミザクラ <i>Prunus Verecunda</i> | オオヤマザクラ <i>Prunus Sargentii</i> |
| 花 | 花は20mmほどで他の桜に比べて小さい。花柄にまばらに毛がある。がく筒に毛は殆どなく、赤みがかかる。 | 葉より先に開く。花柄に毛がある。総柄は極めて短い。 がく筒は基部が丸く膨れる。 | 葉と同時に開く。 花柄は無毛。 総柄は5-15mm。がくは無毛。 | 葉と同時に開く。 花柄に毛がある。 総柄は15-20mm。がくは無毛。同所のヤマザクラより2週間ほど遅れて咲く。 | 葉と同時に開く 花柄は無毛。総柄はほとんど無い。 がくは無毛。花の色はヤマザクラ、カスミザクラに比べて桃色が濃い |
| 葉 | 明瞭な重鋸歯がある。葉柄、葉の両面に毛がある。蜜腺は葉の基部にある | 葉の形は長楕円形で桃の葉に似る。葉柄、葉の両面に毛がある。蜜腺は葉の基部にある。 | 若葉の色は赤みがかかる。若葉にはわずかに毛があるがやがて両面毛は無くなる。 裏面は粉白色を帯びる。 葉柄は毛が無く赤色を帯びる。蜜腺は葉柄の上部に一对。 | 若葉の色は普通緑色。花と同時に開く。葉柄には毛がある。裏面淡い緑色で光沢がある。蜜腺は葉柄の上部にある。 | 新芽がやや粘る。若葉は赤みがかり葉柄には毛が無い。裏面わずかに粉白色。蜜腺は葉柄の上部に一对。 |

1.キンキマメザクラ

Prunus incisa ssp kinkiensis

キンキマメザクラ（写真1）は但馬でも最も早く咲くようで、2019年は3月19日に出石町小野で3月31日には来日岳、目坂の奈佐森林公園で咲いていた。花は他のサクラに比べて小さく、咲き始めは花柄が短いので同じ時期ヤマザクラと見分けやすい。しかし花の散り際には花柄は2倍近く成長して小型の花を咲かすヤマザクラと見分けにくい個体があった。



(写真1)
2019.3.19 出石町小野

葉は重鋸歯（葉のギザギザが2重）で両面に毛が生えて艶がない、というのが

基本であるが、必ずしも重鋸歯に見えないものもある（写真2）。



(写真2)
2019.3.31 豊岡市目坂

毛の有無や一对の蜜腺が葉柄ではなく葉の基部にあること等で見分けられた。

(写真3)



(写真3)
2019.4.29 来日岳

2.エ

エドヒガンの花は花筒の元がフラスコ
 このように膨らむ（写真4）のと、葉が
 細長く蜜腺がこれも葉の基部につく（写
 真5）ことで容易に見分けられる。また
 花柄や葉柄に毛がある。



(写真4)
 2018.4.2 和田山町白井



(写真5)
 2019.5.21 福知山市上夜久野

3. ヤマザクラ *Prunus jamasakura*

ヤマザクラもキンキマメザクラとほぼ
 同じ時期に咲き、来日岳では2019年3月
 31日に両種が咲いていた。この日確認で
 きたサクラの花はヤマザクラキとンキマ
 メザクラのみでカスミザクラは確認でき
 なかった。花柄、葉柄、葉には毛が無い
 （写真6）。



(写真6)
 2019.3.31 来日岳

花と一緒に出る若葉が赤っぽいので、枝
 全体が赤味を帯びて見える（写真7）。



(写真7) 2018.4.2 来日岳

若葉の時期は判りにくいですが、葉の裏が
 白く鋸歯が細かい（写真8）ことなどで
 見分けられる。



(写真8)
 2019.4.29 来日岳

4. カスミザクラ *Prunus verecunda*

カスミザクラはヤマザクラから2週間
 ほど遅れて咲く、と図鑑などには書いて
 あるが、2019年4月29日に来日岳では
 カスミザクラが咲いていた。花は林道沿
 いで確認する限りではカスミザクラ以外
 は見られなかった。同じ日に神鍋の稲葉
 でもカスミザクラの開花を確認してい
 る。



(写真9) 2019.4.27 竹野町椒

見分け方は、花柄、葉柄、葉脈に毛が有
 る（写真9、10）ことであるが、図鑑など
 では毛が無いものもあるという。



実際毛は濃いものから、よく見ないと判りにくいものまでさまざまであった。ヤマザクラとの大きな違いとしては葉の裏が白くならず、艶がある(写真11)ことである。また若葉の時期はヤマザクラのように葉が赤っぽくならない(写真10)。



5. オオヤマザクラ *Prunus sargentii*

オオヤマザクラは、2016年に香美町小代区熱田の若狭越え林道で、桃色が濃いサクラがあちこちに咲いて気になっていた。

調べてみるとオオヤマザクラらしく、2018年に再度行って確認した。かつて私が兵庫県初のマグソクワガタを採集した場所でもある。

花の色が他のサクラに比べて濃く(写真12)、同時期に咲くカスミザクラが白く見えてしまう。



花柄や葉柄に毛は無く(写真13)、新芽が開いたつぼみの部分に粘りがある。



ヤマザクラ、カスミザクラには有る花の総柄が無いが、ごく短い(写真14)。



このように「山桜5種」はその特徴を知り、実際に手に取って調べることによって一応見分けることはできた。しかし花だけでは判別できず葉が出るのを待って確認した例もあり、それぞれの種に変異が多いことを感じた。

同じ種でも花については、大きさ色の濃さなど個体（木）によってまちまちで、手に取ってルーペで見るまで判りにくいものもあった。特にヤマザクラには変異が多いという。

キンキマメザクラとエドヒガンは比較的に見分けやすく、この両種は蜜腺が葉の基部にあることも特徴である（他3種は葉柄の上部にある）。ヤマザクラ、カスミザクラ、オオヤマザクラも花柄や葉柄の毛の有無、鋸歯の大きさ、葉裏の白化の度合いや艶で判別できる。このように桜の種の違いは花と葉でとりあえず見分けられるが、花だけでは雑種や突然変異ではないかと思われるものもあって、判別できないものが一部で見られた。



またサクラ類の葉に特徴的な蜜腺に実際にアリがやってきて蜜をなめる光景も確認でき生物の多様性の一コマとして興味深かった（写真15 蜜腺のアリ）。

このような植物についての疑問は専門家に問い合わせるという方法もあったが、現地ですべて実際に調べて確認すること、本来の目的以外にも様々な情報が得られるなど、自分の足で実際に野外に出かけるフィールドワークがやはり面白い。まあ桜の時期に話のネタにでもしていただけたら幸いである。

[参考文献]

- 1.兵庫県緑化推進委員会(1996)「兵庫県の樹木誌」兵庫県
- 2.北村史郎、村田源共著(1979)「原色日本植物図鑑 木本編Ⅱ」保育社
- 3.田村道夫編(1981)「日本の植物 研究ノート」培風館
- 4.近田文弘(2016)「桜の樹木学」株式会社技術評論社

久斗山のクモだより

山本 一幸

1 久斗山について

兵庫県の北西の端、鳥取県との県境に位置する美方郡新温泉町、その町内でも特に冬は豪雪地となる久斗山地区は、そのせいで標高 150m ほどなのに本来なら標高 500m 以上でないと自生しないブナがある。久斗山地区は戸数 40 戸ほどの中山間地で、集落の中を久斗川が流れ、その流域に水田などのわずかな耕作地がある。かつて江戸時代にはたたら製鉄で栄えた歴史がある。村の上手の小高い山裾には「大杉神社」があり、境内には樹齢 800 年以上とも言われる県指定の天然記念物になっている県下最大のヒノキの巨木が村を見守っている。その根元には“どぶろく”を仕込んだ壺が埋設され、年に 1 回、10 月の祭礼の時に開いてどぶろくの出来具合を見て、その年の吉兆を占う風習が残っている。

筆者は久斗山の地で生まれ、60 有余年ずっと住み続けている。子供の頃からこの地の自然に囲まれ、兼業農家としてわずかな米と野菜を作って生活をしてきた。四季の移ろいの中で、共に多くの生き物が身近に暮らしている。日々の営みのなかで、それは当たり前のことであるが、いつの頃からかポケットにコンパクトデジタルカメラを忍ばせ、農作業の合間などに見つけた草花や出会った小動物を撮影するようになった。それを『四季の久斗山生き物だより』として気まぐれに Facebook に掲載し、友人や知人に紹介してきた。今回、2022 年 2 月から 10 月に掲載した生物について記録してみた (表 1)。

なお、生物の種名は写真からの判別によるもので誤同定の可能性は否めない。一応、クモ類においては研究者として慎重に扱っており、ここにはリストと解説をもって報告したい。Facebook に投稿した記事をご覧になり、あるいは本稿の内容に疑問を抱かれましたら、ご意見、ご教示賜れば光栄の至りです。

2 2022 年に Facebook に登場した生物種 (表 1, 2022 年 2 月～10 月 太字斜体はクモ類)

| 月 日 | 場所ほか | 生物種 |
|----------|-------|---|
| 2 月 4 日 | 立春、冬芽 | ナニワズ、クロモジ、ノグルミ、ケンボナシの実 越冬中のナミテントウとカメノコテントウ |
| 3 月 27 日 | 早春の山裾 | キンキマメザクラ |
| 3 月 27 日 | 春の里山 | アセビ、タムシバ、ガマズミ、ハウチワカエデ、ヤドリギ ヤマザクラの一種、サンインシロカネソウ、ホクリク (サンイン) ネコノメソウ、タチツボ (シロバナ) スミレ マエトビケムリグモ |
| 3 月 30 日 | 春の里山 | スミレサイシン、ミヤマカタバミ、エンレイソウ、 キクザキイチゲ、ヤマエンゴサク、ネコノメソウ、ヤマビル アライトコモリグモ |
| 4 月 24 日 | 水路 | アオグロハシリグモ、クラークコモリグモ |

| | | |
|--------|-----------|---|
| 4月25日 | 水田 | (ハシボソ) カラス、シュレーゲルアオガエル、シマヘビ、モリアオガエル、ヒラタゴミムシの一種 キバラコモリグモ |
| 5月3日 | 耕作放棄田 | ウワバミソウ、ワサビ、イラクサ、ホウノキ、ヤブデマリ、アカメガシワ、ゼニゴケ |
| 5月5日 | 新緑の野山 | カマツカ、コバノガマズミ、タジマタムラソウ ムツボシオニグモ |
| 5月6日 | 里山 | フジ、オニグルミ ハルゼミ、ウスバシロチョウ クスマサラグモ、ユノハマサラグモ、カラフトオニグモ |
| 5月15日 | 初夏の陽気 | ヨツメトビケラ |
| 5月16日 | 大杉神社 | ギンリョウソウ |
| 5月17日 | 畑の畦畔 | オオジシバリ |
| 5月28日 | 水田 | ツリガネヒメグモ、スジブトハシリグモ、ワシグモの一種 |
| 6月15日 | 夜の水辺 | アマガエル、モクスガニ、ゲンジボタル アオグロハシリグモ |
| 6月16日 | 窓辺 | オオオバボタル |
| 6月18日 | 水田 | トノサマガエル、アマガエル、コシマゲンゴロウ、カゲロウの一種 オオシロカネグモ |
| 6月22日 | 車のフロントガラス | マルヅメオニグモ |
| 6月30日 | 自動販売機、畑 | エゾスズメ、セスジスズメ |
| 7月4日 | 畦、シカ柵 | ネジバナ マガネアサヒハエトリ |
| 7月7日 | 水田 | クリ、ヤブカンゾウ、オモダカ オオシオカラトンボ、ナツアカネ |
| 7月8日 | 自宅の玄関 | コアシダカグモ |
| 7月11日 | 郵便受け | キボシアシナガバチ |
| 7月14日 | 早朝の草むら | オニヤンマ、ヒメウラナミジャノメ、ヒメギス、ツマグロバツタ |
| 7月18日 | 田んぼ、庭先 | クサノオ ゴマダラカミキリ、フキバツタの一種 ハシリグモの一種 (子グモのまどい) |
| 7月27日 | 畑 | タバコガ (幼虫) コハナグモ (卵のう) |
| 8月26日 | 農作業の合間 | カブトムシ (メスの死骸)、ヒメウラナミジャノメ ナガコガネグモ、マルゴミグモ、ゾウシキカニグモ |
| 10月3日 | 畑 | クモバチの一種に狩られたアオオニグモ |
| 10月12日 | 畑 | ヤチグモの一種 |

3 クモ類のリストと解説

表1の生物種において、クモ類を抜き出し、そのリストと一部の種について若干の解説を述べる。なおリストの配列は谷川(2022)に準拠した。

ヒメグモ科 Theridiidae

ツリガネヒメグモ *Parasteatoda tabulata* (Levi, 1980)

コガネグモ科 Araneidae

アオオニグモ *Aoaraneus pentagrammicus* (Karsch, 1879)

2022年10月3日、午前10時ごろ。畑仕事の途中で路面をハチ目クモバチ科 Pompilidae の一種に狩られて運ばれている場面に遭遇、数コマの写真を撮影する時間しか無く(写真1)、数分しか観察できなかった。

クモバチの仲間は、クモを襲って毒針を刺して麻痺させ、地中に掘った巣穴などに運びこんで卵を産みつけ、ハチの幼虫は麻酔状態のクモを食べて成長することが知られている(小野・緒方, 2018)。このアオオニグモも麻痺したまま巣穴に運ばれ、幼虫の餌になったと思われる。

(写真1 クモバチの一種に運ばれるアオオニグモ)



マルヅメオニグモ *Araneus semilunaris* (Karsch, 1879)

2022年6月22日、早朝、田んぼに行った帰りに軽トラックのフロントガラスにいるのを発見した(写真2)。ダンゴ状になった餌を持っており、夜間に網を張っていてそのまま朝になり、網で捕食しているところを軽トラックが横切ったと推測する。オニグモの仲間では小型で、焦げ茶色をした光沢のある横長の腹部の前半は色が薄い。まれにしか見つからない種類で、新温泉町内からは今回初めての記録となる。

(写真2 軽トラのフロントガラスについてきたマルヅメオニグモ)



ムツボシオニグモ *Araniella yaginumai* Tanikawa, 1995

ナガコガネグモ *Argiope bruennichi* (Scopoli, 1772)

マルゴミグモ *Cyclosa vallata* Keyserling, 1886

2022年8月26日、田んぼの近くの農機具小屋とシカの防獣柵の間に網を張っていた(写真3)。ゴミグモの仲間はゴミや食べ滓を網に残し、クモ自らゴミに擬態する。マルゴミグモはゴミを丸く玉状にして網に縦に点々と並べ、自分もゴミ玉の一部となっている。但馬では海岸部で多く見つかるが山地では希で、久斗山で初めて見つけた。



(写真3 網の中央で丸くなるマルゴミグモ)

カラフトオニグモ *Plebs sachalinensis* (S. Saito, 1934)

アシナガグモ科 Tetragnathidae

オオシロカネグモ *Leucauge celebesiana* (Walckenaer, 1842)

サラグモ科 Linyphiidae

クスマサラグモ *Nerienne fusca* (Oi, 1960)

ユノハマサラグモ *Turinyphia yunohamensis* (Bösenberg & Strand, 1906)

タナグモ科 Agelenidae

ヤチグモ属の一種 *Coelotes* sp.

2022年10月12日、畑でサツマイモを収穫中にビニールマルチの間から出てきた。オスの成熟個体であるが、ヤチグモの仲間は形態や色彩が類似しており、外観だけでは種の同定ができない。明確に種を知るには、オスの場合触肢の器官、メスの場合は生殖器を調べなければならない。

アシダカグモ科 Sparassidae

コアシダカグモ *Sinopoda forcipata* (Karsch, 1881)

2022年7月8日、朝出かける時に自宅の玄関の引き戸に居るのを見つけた(写真4)。オスの成熟個体であった。野外では朽ち木の樹皮下や倒木の下で見つかるが、家屋に入り込みゴキブリなどの害虫を捕食することもある。同じように屋内性でゴキブリの天敵とされるアシダカグモ *Heteropoda venatoria* がいるが、こちらは浜坂で記録(山本, 2000)があるものの希で、久斗山などの山間地の屋内で見つかるのはほとんどが本種である。



(写真4 玄関戸にいたコアシダカグモのオス)

キシダグモ科 Pisauridae

アオグロハシリグモ *Dolomedes raptor* Bösenberg & Strand, 1906

スジブトハシリグモ *Dolomedes saganus* Bösenberg & Strand, 1906

2022年5月28日、田んぼに水を張って代掻きをし、田植えが終った水田には水辺の好きな多くの

生物が生息するようになる。田んぼの雑草も伸び、それを取るため泥の中を手でかき混ぜていると、目の前の水面に浮かんで逃げていく（写真5）。水辺に生息する徘徊性のハシリグモの仲間は数種類いて、水面を走るだけでなく、危険が及ぶと水中に潜水して身を隠すこともある。



(写真5 田んぼの水面に浮かんだスジブトハシリグモ)

ハシリグモ属の一種 *Dolomedes* sp.

コモリグモ科 Lycosidae

キバラコモリグモ *Pirata subpiraticus* (Bösenberg & Strand, 1906)

クラークコモリグモ *Piratula clercki* (Bösenberg & Strand, 1906)

アライトコモリグモ *Trochosa ruricola* (De Geer, 1778)

2022年3月30日、春の始まり、畑を耕したり草むしりをしていて地表徘徊性のコモリグモの仲間に多く出会う。アライトコモリグモは日中、土の中に居ることが多く、土を掘り返すと出てくる（写真6）。4月の終わりから5月ごろは、地中の穴で産卵して卵囊を守っており、その頃に畑や田んぼを耕転していると腹部に白い卵囊をつけたメスが、迷惑そうに逃げていく姿を見かける。



(写真6 アライトコモリグモのオス)

カニグモ科 Thomisidae

コハナグモ *Diaea subdola* O. P.-Cambridge, 1885

ゾウシキカニグモ *Xysticus saganus* Bösenberg & Strand, 1906

ワシグモ科 Gnaphosidae

マエトビケムリグモ *Sernokorba pallidipatellis* (Bösenberg & Strand, 1906)

ワシグモ科の一種 Gen. sp.

ハエトリグモ科 Salticidae

マガネアサヒハトリ *Phintella arenicolor* (Grube, 1861)

2022年7月4日、田んぼを囲んだ高さ2mのシカの防獣柵の金網にぶら下がってハエを捕食していた（写真7）。草間を徘徊し、頭胸部の前面に二つ並んだ単眼で距離を計って獲物にジャンプして捕らえるハエトリグモの仲間は、時にこちらに目を向けることがあり、その風貌から愛らしさを感じることもある。



(写真7 ハエを捕食するマガネアサヒハトリ)

4 おわりに

四季、特に春から秋において山間地のわずかばかりの農地を耕し、牛糞などの堆肥を鋤きこみ、農薬はほとんど散布しないから雑草と虫が集る。美味しく安全な自家消費米と野菜が収穫できれば良いと割り切れば草刈りの手間も、虫喰いだらけの野菜も我慢できる。ここ近年、シカやイノシシ、ハクビシンなどの害獣の標的となって、春先のタマネギ苗やジャガイモの新芽、収穫前のトマトやカボチャ、サツマイモが、酷いときは全滅してしまうこともあったが、農地全体を囲む防獣柵を設置してからは、なんとか被害が収まっている。

農作業の合間に会う生き物たちは、気持ちを和ませ、疲れを癒やしてくれるし、時には思わぬ発見がある。2015年4月11日に家の前の畑で何気なく見つけたクモ（写真8）は、兵庫県版レッドリスト（兵庫県, 2017）でAランクのキノボリトタテグモのオスだった（環境省のカテゴリーでは準絶滅危惧NT）。

これからも身近な生き物たちを見つめながら、気持ちに余裕を持ちつつ山間の地で農作業に勤しんで行くつもりである。ポケットにカメラを忍ばせ、機会があれば生き物の姿を写し、生き物だよりとして紹介できればと思っている。



(写真8 キノボリトタテグモのオス)

[参考文献]

小野展嗣・緒方清人(2018)「日本産クモ類生態図鑑：自然史と多様性」東海大学出版会

新海 明・谷川明男・安藤昭久・池田博明・桑田隆生(2022)「CD 日本のクモ Ver.2022」

CD-ROM, 著者ら自刊

谷川明男(2022)「日本産クモ類目録」 Ver.2022R1 <http://www.asahi-net.or.jp/~dp7a-tnkw/japan.pdf>

兵庫県(2017)「兵庫県版レッドリスト 2017 (哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類)」

山本一幸(2000)「浜坂町でアシダカグモの生息を確認」 IRATSUME, 24:42.

[Facebook] <https://www.facebook.com/kazuyuki.yamamoto.1806/>

モリアオガエルの上陸日数

村田 美津子

モリアオガエルはアオガエル科に属する樹上性のカエルだ。指先が吸盤状のため、高い所に登ることができる。樹上にソフトボール大の卵塊を産卵することで知られているが、水路の壁面のような低い所にも産卵する。城崎町湯島の産卵場（図1中①）には樹上にも水路壁面にも卵塊が産み付けられている。この水路は全面に土砂が溜まっていて、水路の端の升状部にもかなりの土砂が堆積していた。水がよく干上がる場所で、壁面の卵塊がカラカラに乾いていたり、水路の泥の中で幼生が死んでいたたりすることもあった。

モリアオガエルは但馬ではわりとよく卵塊を見かけるが、兵庫県レッドリスト B ランクに指定されている。6月下旬、壁面に数個産み付けられた卵塊のうち干からびかけたものを1個、竹野町の自宅に持ち帰り飼育した。昆虫飼育用のプラスチックケースを使用し、北向きの縁側で日中はレース越しの光が当たる所で金魚の餌を与えた。前後の足が生え、飼育ケースに張り付くようになった段階で上陸と見なし、上陸後はもとの産卵場の野外に帰した。



図1 産卵場

成長の早い幼生に脚が生え始めた頃にふと（上陸した日と数を記録しよう）と思い、上陸が始まった7月16日から記録を付けていった（表1）。全てが上陸したわけではなく、途中で2匹が死んでいたが記録は付けていない。幼生の数が半分ぐらいに減っていた頃の記憶があるので、21日目以降だと思う。

日によって上陸日数は異なり、多少の増減を繰り返した。この卵塊は、上陸開始10日目で上陸匹数の約91%の328匹が上陸し、46日間で361匹の子ガエルが上陸した（図2）。

| 7月 | 16日 | 17匹 | 8月 | 4日 | 5匹 |
|----|-----|-----|----|-----|---------|
| | 17日 | 25匹 | | 16日 | 3匹 |
| | 18日 | 29匹 | | 23日 | 3匹 |
| | 19日 | 96匹 | | 30日 | 3匹 |
| | 20日 | 7匹 | | | 終了 |
| | 21日 | 55匹 | | | 上陸計361匹 |
| | 22日 | 46匹 | | | (内死亡2匹) |
| | 23日 | 26匹 | | | |
| | 24日 | 27匹 | | | |
| | 28日 | 19匹 | | | |

産卵期間に幅があるように、上陸日数にも幅があり、どこかで何匹かが生き残れる仕組みになっている点に興味深かった。日ごとの上陸数グラフはピークが一つのきれいな山形を描くと思っていたが、予想に反して凹凸になったことと、最終上陸までに46日もかかったことは新鮮な驚きで、30日目以降は全部が上陸するのか毎日やきもきしていた。全部の幼生が上陸したときには正直に言ってかなり安堵した。

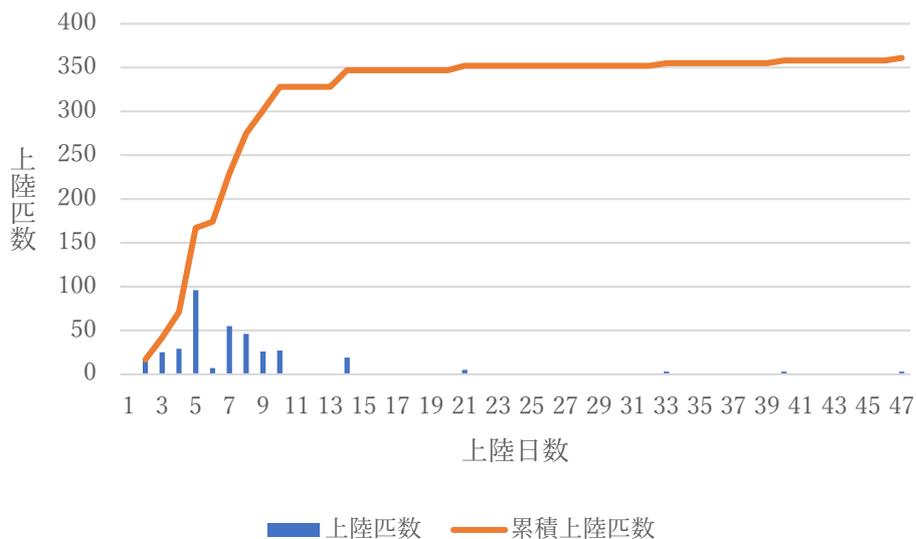


図2. モリアオガエル累積上陸匹数

7月に入ると水路が干上がることも殆どなくなっていた。(写真1, 2)

なお、この飼育は卵塊中のモリアオガエルの命を救うことを主目的としていたため、水温や気温などの基本的データは計測していない。



写真1 (2022.7.14)



写真2 (2022.7.14)

豊岡市の秋・冬の鳥情報 2022.10～2023.3

村田 美津子

記録用に鳥類の写真を撮っている。数が少なく、写りも悪いが稀少な種が撮れたので報告することにした。2022年10月から2023年3月にかけて、竹野、城崎、豊岡で確認した9種を報告したい。稀少なもの以外に執筆者があまり見慣れてないものも選択した。今後もこのような形で観察は続けて行きたい。

記載は、仕分け番号・性別/科名、確認年月日、確認場所、希少種指定ランク、渡り区分、コメントの順で行っている。性別は見た目では判別できるもの、希少種はランク指定されている場合のみ、文一総合出版「♪鳥くんの比べて識別！野鳥図鑑 670」を元に記載している。本文中の番号と写真番号、地図中の番号は全て対応。写真は全て執筆者が撮影。

①ノビタキ♀/ヒタキ科

2022年10月15日 竹野町和田
兵庫県レッドリスト A ランク
旅鳥。風に揺れるセイタカアワダチソウの穂先にとまっていた。

②ハジロカイツブリ/カイツブリ科

2022年12月28日 竹野新港
冬鳥。虹彩が赤い。魚や甲殻類などが餌で、潜水と浮上は別地点。

③ウミアイサ♀/カモ科

2023年1月16日 竹野新港
冬鳥。成鳥の虹彩は赤色。後頭部のボサボサがポイント。

④オオハム/アビ科

2023年1月16日 竹野新港
兵庫県レッドリスト要調査
冬鳥。カモより大きな見慣れない鳥が2羽いたので気づいた。

⑤ケアシノスリ/タカ科

2023年1月16日 豊岡市
兵庫県レッドリスト B ランク
冬鳥。豊岡には10年ぶりぐらい現れたらし

い。白さが際立っていた。

⑥ノスリ/タカ科

2023年1月30日 竹野町竹野
兵庫県レッドリスト B ランク
冬鳥。トビより少し小さくて白っぽい。腹部に広い褐色斑がある。但馬では夏は見ないように思う。

⑦イカルチドリ/チドリ科

2023年1月30日 竹野町竹野
兵庫県レッドリスト B ランク
留鳥。大雪の後、雪が溶けた地面で餌探しに夢中。黄色いアイリングがある。

⑧マナヅル/ツル科

2023年2月2日 豊岡市
環境省カテゴリ：絶滅危惧Ⅱ類
冬鳥。但馬地域では珍しい。2羽飛来。写真を撮っている人の10mぐらいまで近づくこともあった。

⑨ツクシガモ/カモ科

2023年3月3日 城崎町今津
環境省カテゴリ：絶滅危惧Ⅱ類
冬鳥。但馬地域では珍しい。夕暮れに一羽、餌探しに夢中。おそらくメス。



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨



図 1

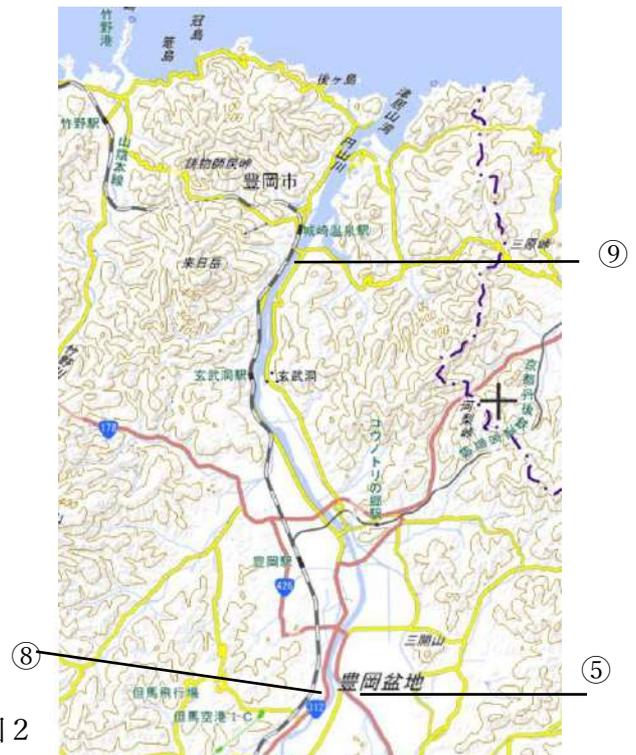


図 2

竹野の漂着物

村田 美津子

漂着物は、自然、人の営み、時代の変遷、海外事情などを教えてくれる。海が荒れた翌日にゴミ拾いを兼ねて浜に行くと面白い物に出会えることが多く、その一部を報告する。一人でも多くの人が漂着物に関心を持ち、海に行った時は1つでいいのでゴミを拾って帰るようになってもらいたい。

記載は、仕分け番号・性別/科名、確認年月日、確認場所、希少種指定ランク、コメントの順で行っている。希少種はランク指定されている場合のみ記載している。本文中の番号と写真番号、地図中の番号は全て対応（図1）。写真は全て執筆者が撮影。

①ゴバンノアシ/サガリバナ科

2022年7月24日 宇日の浜

環境省カテゴリ：絶滅危惧ⅠA類

果実の中身が空洞で水に浮かぶため、種子の海流散布を行う。これは外皮がボロボロになり、内側の繊維質が現れていた。本州日本海沿岸・太平洋沿岸、北海道南東沿岸にも漂着記録があり、漂着数は増加傾向にある¹⁾。名前は碁盤の脚のような形をしているところからきている。

②マメ科の種子

2022年12月28日 竹野浜

熱帯から亜熱帯地方のマメ科植物の種子。何種類かあり、海流散布で日本にも流れ着く。海豆とも言う。あまり見つけたことはない。

③モミジガイの仲間/モミジガイ科

2022年12月28日 竹野浜

ヒトデの仲間。夜行性で貝などを食べ、昼間は砂に潜っている。

④プルタブ

2022年12月28日 竹野浜

プルトップ式時代のプルタブ。今、缶飲料はステイオンタブを経てボトル型になり、このタブを拾うことは少なくなった。

⑤注射器

2022年12月28日 竹野浜

漂着して欲しくない物 No.1 鳥取県では、中国由来の物が大半を占め、日本と韓国由来は少ない²⁾。今シーズンはロシアの物が多く漂着したとも聞く。

⑥ロープ

2023年2月12日 竹野浜

漂着ごみだが、回収しづらい。ハートを作るなら、砂浜に直接描いて欲しい。

[引用]

1) 中西弘樹. "種子散布の謎を解く." 長崎県生物学会誌 = Transactions of the Nagasaki Biological Society/長崎県生物学会編集委員会編 72 (2013): 41-45.

2) 岡野 多門、安本 幹. 一般社団法人 廃棄物資源循環学会. 廃棄物資源循環学会論文誌 . vol.24, no.5, pp.97-104, 2013 (Released:2013-10-10)



①



②



③



④



⑤



⑥



図1

飼ってみてわかったヤゴの気持ち

西垣 由佳子

*杉野 安梨

* 但東 野あそびくらぶ いつなっと

2021年春、ヤゴの飼育を始めた。私と杉野氏にとって、ヤゴの飼育は人生で初めての経験。それぞれ試行錯誤しながらコヤマトンボのヤゴを飼育し、羽化を見守り、最終的に大空へリリースすることができた。この貴重な経験で知ったこと、感じたことをここで紹介したい。興味のある方は暇つぶしにでも読んでいただければと思う。

<2021年3月27日>

5月に行う高橋小学校における「プールのヤゴ救出作戦」に先駆け、この日、プールでコヤマトンボのヤゴを採取。飼育ケースに入れて、それぞれ自宅へ持ち帰った。

杉野氏から早々に緊急連絡が入った。「ヤゴがエサを食べない」という泣きの連絡だった。ヤゴは生きてエサしか食べない。冷凍アカムシを与える場合は、“ピンセットでアカムシをつまんで、まるでアカムシが生きているかのように揺らして食べさせる”とトンボ図鑑には書いてある。そして、終齢のヤゴは爆食いするという情報もあった。しかし、私たちの飼育していたヤゴには通用しなかった。いくらアカムシを顔の前で揺らしても、ウンともスンとも反応せず、食べる気配のない日が続いた。杉野氏からは生きてエサとして水槽に入れたオタマジャクシが、逆にヤゴの頭をかじっているような動画まで送られてきた。(写真1 動画1 杉野)



(写真1)

なぜ食べてくれないのか。餓死してしまうのではないかと、まるで離乳食を食べてくれない子どもに悩む母親のような心境であった。杉野氏にとっても相当なプレッシャーのかかる日々であったに違いない。一週間ほど四苦八苦したが、冷凍のアカムシを与えるのは諦めることにした。きっと、冷凍ものには手を出さないグルメなヤゴなのだ、と思うことにした。生きてカゲロウやアカムシの入ったプールの水を採取してはヤゴの水槽に入れ、「もう勝手に食べてください方式」に切り替えた。羽化直前のヤゴはあまりエサを食べないことも本には書いてあったが、飼育し始めてから羽化まで一ヶ月近くかかったということは、やはり多少なりとも何かを食べて

同時期に飼育していたギンヤンマのヤゴはよく食べるうえに、ことあるごとにおしりからジェット噴流を出して水中を移動していた。だが、コヤマトンボのヤゴは「動かない、食べている気配がしない」の二点張り。杉野氏と私は、心が通じている気がまったくしないヤゴ飼育を細々と続けた。

<4月24日>

早朝、杉野氏から連絡があった。目を覚ますと、ヤゴが三段ボックスのへりで羽化し始めているという。(写真2 杉野)

飼育の水槽には羽化棒を立てていたはずなのに、なぜ三段ボックスのへりなのかわからないまま、杉野氏は離れたところから観察を続け、LINEでヤゴの様子を知らせてきた。杉野氏の飼育していたヤゴの羽化は成功し、立派なコヤマトンボになった。あくる日には採取した場所近くでリリース、トンボは大空に飛び立っていった。



※ 杉野氏から送られてきた観察記録は巻末に記載

<5月16日>



それから約3週間経った5月16日の真夜中、私の飼育しているヤゴもついに羽化棒の根元にスタンバイして、動かなくなった。羽化棒は「トンボ入門」(新井,2004)に書かれていた通り、割り箸を割ったものを輪ゴムで繋げてミニ剣山に刺して沈め、水面から30cm出した。日付が変わった17日の0時には、ヤゴが羽化棒を登り始めた。0時30分には羽化棒のてっぺんまで登り切ったものの何かがおかしい。ヤゴが落ち着かない様子で前肢を伸ばして、空を切るのだ。前肢だけではなく、中肢や後肢も動かし、見えない何かを必死につかもうとしているようだった。

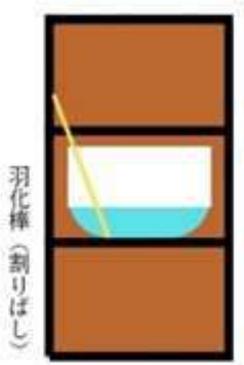
(写真3 動画2)

その後、ヤゴは何かを探すように割り箸のまわりを回り、せっかく登った羽化棒を下りて水中に沈んでしまった。ヤゴの一連の行動は、私が何か間違っていることを感覚的に気付かせるものだった。シオカラトンボやギンヤンマに比べ、コヤマトンボの肢は非常に長い。羽化棒の直径が肢の長さに合わせていないように感じた。急遽、もう一本割り箸を用意し、太めの羽化棒を作り、不織布を巻いて先ほどの羽化棒の横にそっと刺した。その30分後、再びヤゴは羽化棒を登り始め、前回と同じように前肢で空を切った後、爪が引っかかった不織布を巻いた方の太い羽化棒へと体を移動させた。しばらく居心地を確かめるような素振りを見せた後は、もう肢で空を切るような動作はしなかった。その後、動かなくなり、1時58分には背中が割れて羽化が始まった。(動画3)

同時期にシオカラトンボとギンヤンマも飼育し、羽化を見守った。3種とも飼育してみると、エサへの食いつき、羽化棒に登る様子や水中での動きが大きく異なっていた。特にコヤマトンボについては、生息環境が川岸の植物の根ぎわなどであり、ふだんは根につかまったり、落ち葉などに紛れ込んだりして生活している。考えてみると、扁平な体は落ち葉の間や石の隙間に入るのに適しているだろうし、観察中ほ

とんど動かなかった、というのも納得できる。UFO キャッチャーのように長い肢も植物につかまりやすいようになっているのだろう。

最後に、杉野氏の飼育したヤゴの羽化した場所がなぜ三段ボックスだったのか、である。当時の飼育ケースはこのように三段ボックスの真ん中あたりに置かれていた。(図1)



(図1)

推測するに、杉野氏のヤゴは飼育ケースに斜めに立てかけてある羽化棒を伝って登ったものの、やはり割りばしの細さから、そこを羽化場所には選べなかったのではないかと思う。もしくは、羽化棒が斜めに固定してあったこと自体も理由かもしれない。(図1) 羽化した後の羽化殻の角度を見ると、羽化棒に対して斜め45度になる。羽化棒自体が斜めだと殻から出たときのヤゴの頭が下がってしまうことになり、命取りになりかねない。そうでなくとも、無防備な羽化の時間は鳥たちの格好の餌食になる。

条件の整ったところを探した結果、割り箸の羽化棒ではなく、幅が1.2cmで奥行きのある三段ボックスのへりに行きついたのではないか。そんな結論に至った。

私たちの初めてのヤゴの飼育は「素人ながら実際にやってみてこそ、なんとなくわかった」ことであつた。もちろん、羽化のクライマックスは手に汗を握って観察したし、不完全変態の真夜中のドラマには



(写真4) 使用した羽化棒

感動を覚えた。しかし、それ以上に、飼育は図鑑の情報を鵜呑みにせず、本来の生育環境と照らし合わせて考えなければならないことがよくわかった。

コヤマトンボのヤゴの飼育方法は普通の図鑑には書かれていなかったし、図鑑に書かれていたのはシオカラトンボやコオニヤンマの飼育方法だった。羽化棒の太さはヤゴの種類によって変え、肢の長さに合わせた羽化棒設置をすべきだった。コヤマトンボのヤゴがどのような植物や物につかまって羽化するかをよく考えれば、おのずと見えてくることであつたが、それに気づいたのはヤゴたちが大空に飛び立ったあとだった。

今でも勝手に飼育ケースに入れられて、つかまる場所に苦労しながら羽化していったヤゴのことを考えると少々胸が痛む。大空に無事リリースできたことが唯一の救いである。

.....【杉野氏の観察記録より】.....

(4月24日コヤマトンボの羽化。三段ボックスの最上段で羽化。羽化途中からの観察)

5:34 さなぎから、体を逆さまに仰け反らせている(イナバウアーの体勢)。時々、ピク、ピクと上体を跳ね起こす。体の色は黄色がかった茶色。

- 6:07 すこし目を離れた際に、イナバウアーを解除。羽化殻にしがみついている。体の色はうす茶色だが、黄色が強くなる。
- 6:10 シワシワで小さかった翅が、胴と同じ長さになる。
- 6:12 胴より長く翅が伸びる。徐々に横幅も広がってくる。
- 6:37 翅が伸びきり、硬化してくる。翅の色も透明に。
- 7:08 胴がじわじわと伸びてきている。同時に、体の色は頭から胸、尾から胴へと、先端からじわじわ黒味が強くなる。
- 7:25 お腹が伸びきる。翅も立ち上がってくる。
- 7:33 体液をぽとぽと、尻の先端から出す（10滴未満）。足が自立してくる。
- 7:45 胴が細くなる。
- 8:00 胸が黒くなる。腹はまだ茶色く、全体的に黒ずんでいる。翅が硬さを増し、テカテカと照るようになる。
- 8:11 翅を一息に広げる。
- 8:18 指を近づけると乗る。
- 8:22 外へ放しに行くため、飼育ケースに入れて観察。
- 8:40 体の黒色と黄色がはっきりと出る。半透明だった目は、カナブン色になる。



(動画1)

動かないヤゴをオタマがガジガジしている動画(YouTube)



(動画2)

ヤゴが羽化棒に登り、何かをつかもうとしている動画(YouTube)



(動画3)

羽化する様子を撮影したタイムラプス動画(YouTube)



(写真) 羽化したコヤマトンボをリリース

[文献] 新井 裕「トンボ入門」どうぶつ社 (2004)

※月原一浩氏(NACOT/としま生態系環境学習リーダー)、マイマイ先生(西岡愛香氏)にはヤゴ救出作戦並びに環境学習、ヤゴ飼育に関して温かいご指導ご鞭撻を賜りました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

竹野の方言【魚介類】

松本 茂樹

○方法：竹野産の魚類、甲殻類、海藻等について後述の魚介図鑑等を示しながら、竹野地区における呼称を聞き取った。

○対象者：豊岡市竹野町の漁業従事者（西町区 50 台～60 台 3 名）及び松本周平氏（元一本釣り漁師）

○期間：2013 年 1 月～2 月 竹野町西町湾港寄合所等にて

○UQ（ユニーク度）：個人的見解で評価 A（超ユニーク） B（かなりユニーク） C（ユニーク）

| | 竹野の呼び名 | 和名 | UQ | 生息域 | 釣りの季節等 | 釣り方等 |
|----|----------------|------------------------|----|---------|------------|---------------------|
| 01 | アナカア | カサゴ | C | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 一本釣り 竿釣り |
| 02 | ポッカア | カサゴ類 | C | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | |
| 03 | シジュウ | アイナメ クジメ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 竿釣り |
| 04 | ギタンチョウ | ダイナンギンポ | B | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 竿釣り |
| 05 | グンジイ (イソベラ) | キュウセン ササノハベラ等 | C | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 竿釣り |
| 06 | アオネジ | キュウセン♂ | B | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 竿釣り |
| 07 | アカネジ | キュウセン♀ | B | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 竿釣り 一本釣り |
| 08 | チュウカア | カワハギ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 竿釣り 一本釣り |
| 09 | チヌ (チンダイ) | クロダイ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 竿釣り |
| 10 | ススキ | スズキ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | セイゴ→ハネ →ススキ |
| 11 | ガシラ | カサゴ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 一本釣り 竿釣り |
| 12 | イス | ウグイ | B | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 竿釣り |
| 13 | アコウ(ワカミズ) | キジハタ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 竿釣り |
| 14 | ハマチ・ブリ | ハマチ・ブリ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | モジャコ/ハマチ /マルゴ/ブリ |
| 15 | デンプク (ギラブク) | フグ類 (シロサバフグ) | B | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | |
| 16 | サンヨリ | サヨリ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 竿釣り |
| 17 | ヨコワ | ホンマグロ (子) | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 7-8kg は”オコワ” |
| 18 | ヒコヤ | グレ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 竿釣り |
| 19 | ニコロマエ | イシダイ (子) | C | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 竿釣り |
| 20 | サゴシ | サワラ (若魚) | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 竿釣り |
| 21 | カンナ | クロソイ | B | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 竿釣り |
| 22 | オウヨウ | クエ類 | C | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 過去に釣果 |
| 23 | メバチ | ウスメバル (沖) オキメバル (磯) | C | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 竿釣り |

| | 竹野の呼び名 | 和名 | UQ | 生息域 | 釣りの季節等 | 釣り方等 |
|----|--------------------|--------------------------------|----|---------|------------|------|
| 24 | キツネ (ハト) | キツネメバル | C | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 竿釣り |
| 25 | ヤマドリ | タカノハダイ | B | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 竿釣り |
| 26 | テンコチ | ネズミコチ | B | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 竿釣り |
| 27 | ウシノシタ | クロウシノシタ ササウシノシタ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 竿釣り |
| 28 | シイノキバ (ウバリ シノハ) | アイゴ | B | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 竿釣り |
| 29 | アゴ (カアゴ / マルアゴ) | カアゴ (ツクシビ ウオ) マルアゴ (ホトビ ウオ) | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 定置網 |
| 30 | ドッチイ | チチブ ヌマチチブ | C | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | |
| 31 | グズ | ハゼの総称 | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | |
| 32 | サザエワニ | ネコザメ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | |
| 33 | エイタン | エイの総称 | B | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 竿釣り |
| 34 | エテガレイ | ソウハチガレイ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 底引き網 |
| 35 | ヤマガレイ | ヒレグロ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 底引き網 |
| 36 | マガレイ | アカガレイ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 底引き網 |
| 37 | アカイカ | ソデイカ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 延縄 |
| 38 | シロイカ | ケンサキイカ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 一本釣り |
| 39 | グベ | ノロゲンゲ | C | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 底引き網 |
| 40 | ベンテンガニ | ワタリガニ ヒラツメガニ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | |
| 41 | ゴエモン | モクズガニ♂ | B | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | |
| 42 | ガゾウ | カメノテ ムラサキイコガイ | B | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 磯見漁 |
| 43 | クロクチ | ムラサキイガイ ムラサキイコガイ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 磯見漁 |
| 44 | シイダカ | バテイラ コシダカガンガラ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 磯見漁 |
| 45 | ニシ | イボニシ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 磯見漁 |
| 46 | タバコニシ | レイシガイ | C | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 磯見漁 |
| 47 | ウマノクソ | バフンウニ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 磯見漁 |
| 48 | アオウニ | ムラサキウニ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 磯見漁 |
| 49 | アマエビ | ホッコクアマエビ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 底引き網 |
| 50 | ドロエビ | クロザコエビ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 底引き網 |
| 51 | オニエビ | イバラモエビ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 底引き網 |
| 52 | セコガニ | ズワイガニ♀ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 底引き網 |
| 53 | マツバガニ | ズワイガニ♂ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 底引き網 |

| | 竹野の呼び名 | 和名 | UQ | 生息域 | 釣りの季節等 | 釣り方等 |
|----|-----------------|------------------|----|---------|------------|---------|
| 54 | ハバ | ハバノリ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 磯見漁 |
| 55 | テングサ | マクサ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 磯見漁 |
| 56 | ドンベラ | ワタモ | B | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 膨らませて遊ぶ |
| 57 | ガニグスバ | アオサ | A | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | |
| 58 | イワノリ | ウップルイノリ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | |
| 59 | ザージ | ウップルイノリ+アサ等 | B | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | |
| 60 | ジンバ | ホンダワラ (丈の長い) | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 磯見漁 |
| 61 | モンバ | ホンダワラ (浅瀬の短い) | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 磯見漁 |
| 62 | アラメ | アラメ、カジメ、 クロメ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 磯見漁 |
| 63 | モゾク | モズク | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 磯見漁 |
| 64 | イシモゾク | イシモズク | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 磯見漁 |
| 65 | ソゾ | ユナ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 磯見漁 |
| 66 | キョウノヒモ ニクムカデ | ムカデノリ | | 砂地 磯 沖合 | 春 夏 秋 冬 年間 | 磯見漁 |

○考察

- ・鳥取県、島根県の呼称に近いものが多く、文化的な影響が伺える。
- ・ユニーク度の高い呼称の中には、現役世代ではほぼ使われていないものもある。先人たちの魚介への思い、遊び心が感じられる。
- ・海藻に方言呼称が多く、海藻食が盛んな地域であることを裏付ける。なお、#60“ジンバ”#61“モンバ”は、実際にはジョロモク、ヤツマタモクなどの非食用のホンダワラ各種が含まれた総称であるが、本表ではあくまでも聞き取りの結果を示す。

[文献] 1. 山崎清張「浜から伝える魚調理事典」旭屋出版(2010)

2. 藤原昌高「地域食材大百科第5巻」農文協(2011)

[参考HP] 1. 但馬漁業協同組合 <http://jftajima.com/gyohou/sakana.html>

2. ヒレグロ市場魚貝類図鑑 <http://www.zukan-bouz.com/sakuin.html>

3. 島根県水産技術センター

http://www.pref.shimane.lg.jp/industry/suisan/shinkou/umi_sakana/sakana/